

'Yomogi' and 'Hou' in Heian Literature (Part1) :
Focalizing 'Hou' in Early Heian Period Kanshibun Discourse

KOJIMA Yukiko

要 旨

『万葉集』においては、わずか一例のみであった「よもぎ」の用例が、十世紀半ば頃になって、和歌や日記、物語の中に散見されるようになり、その後、詠まれるべき草、語られるべき景物となっていく。その理由の一つとして、その時期までに、中国文学に認められる「蓬」に触れたこと、それらに学んで日本においても「蓬」を用いて漢詩文を作ったことを挙げるができる。中国古典文学の言葉の世界、平安初期の日本の漢詩文、さらに、かなで書かれた和歌、日記、物語へと、何が学ばれ、どのような展開をみせているかを考えてゆくために、本稿では、平安初期までの漢詩文における「蓬」が、どのように表現されているかを明らかにし、それらと中国文学との関わりについて検討する。

Key words : 蓬、よもぎ、漢詩文、平安初期、中国文学

(令和2年9月30日受理)

平安時代文学における「よもぎ」「蓬」について（一）

——平安初期までの漢詩文における「蓬」を中心に——

* 小 島 雪 子

『万葉集』においては、わずか一例のみであった「よもぎ」の用例が、十世紀半ば頃になって、和歌や日記、物語の中に散見されるようになり、その後、詠まれるべき草、語られるべき景物となっていく。たくさんある草の中から、にわかには詠まれるべき、語られるべき草として選択され対象化されるようになったのはなぜか。考えられる理由の一つとして、その時期までに、中国文学に認められる「蓬」に触れたこと、それらに学んで日本においても「蓬」を用いて漢詩文を作ったことを挙げることができる。

現在日本では、「よもぎ」には「蓬」の字があてられることが多いが、既に指摘があるように、本来和語の「よもぎ」は漢語の「蓬」と同じではなく、漢語の「艾」、あるいはそれに類似の草を指していたものと思われる。「よもぎ」は「艾」にあたるという認識は日本でも古くからあったのではないか。いつ頃からかは不明だが、たとえば、中国から学んだ五月五日の「艾人」、「艾」をかつらにするなどの風習などを通して認識されていたものと思われる。一方、中国の古典にみえる「蓬」が何を指していたかは現在でも見解が分かれている。本稿は、この問いに答えることを目的とするものではないが、論を進めるに先立ち次節で取り上げることとしたい。

中国文学に触れた日本人が「蓬」をどのように理解していたかも判然としない。『倭名類聚抄』の成立の頃までには、「蓬」は「艾」もしくは「艾」に近い草との認識をもつに至ったようであるが、それ以前についてはよくわからない。実態としてどのような草であると理解していたかは判然としないにしても、少なくとも中国文学の言葉の世界において培養された「蓬」のコンテ

ション、イメージや情感といったものがある程度理解し、まずは関心を向けたであろうことは、『万葉集』の題詞や書簡、平安初期までの漢詩文などに「蓬」の使用が散見され、しかも類型化もみられることから明らかであると思われる。やがて、「蓬」を用いて漢詩文を作った経験を踏まえ、あるいは直接中国の古典に学びつつ、かな文において、「よもぎ」に漢語「蓬」の多様なコンテションを纏わせもしながら、自らの表現世界をつむいでいったのではないかと考える。

中国古典文学の言葉の世界、平安初期の日本の漢詩文、さらに、かなで書かれた和歌、日記、物語へと、何が学ばれ、どのような展開をみせているかを考えてゆくために、本稿では、まず、平安初期までの漢詩文における「蓬」がどのように表現されているかを検討し、それらと中国文学との関わりについてみてゆく。これまでも、中国文学の「蓬」と日本文学との関わりについて言及した寺井泰明氏などの論があるが、^{〔1〕}十分に論じられているとは言えず、なおも検討の余地があるものと思われる。日本で作られた漢詩文が中国文学における「蓬」をどのように受容し、自らの表現をつむいでいったかを明らかにしたい。

二

先にも述べたように、中国古典文学にみられる「蓬」が、実態としてどのような草を指していたかについて見解が分かれている。論を始めるにあたって、まずこの点に触れておきたい。

中国古典には多くのさまざまな「蓬」の用例がみられ、比喩的表現

* 国語教育講座

も豊かで特定の草との関係を見極めがたい例も多く、何を指していたのか、という問いは難しい問いである。ここでは、まず、少なからず用例がみられる「飛蓬」「轉蓬」についてどのように考えられてきたかをみてゆく。というのも、「飛蓬」をどう考えるかが、「蓬」をどう考えるかを左右してきた面があると思われるからである。

「飛蓬」「轉蓬」については、従来キク科ムカシヨモギ属の草とされてきた。ムカシヨモギの和名を充てるのは、管見に拠れば小野蘭山『本草綱目啓蒙』(一八〇三)の指摘が、早いものではないかと思われる。

飛蓬ハ即單二蓬と稱スル草ナリ 和名ヤナギヨモギ 一名ウタヨモギ
 ムカシヨモギ 原野近水ノ地ニ多シ 春宿根ヨリ葉ヲ生シ叢ヲナス 形細長ク柳葉ノ如ク大鋸齒アリ、初夏莖ヲ抽ク一尺餘 葉密ニ互生ス 莖梢ニ多ク枝ヲ分チ花ヲ開ク 野菊花ニ似テ辨甚小ク白色 後白絮ヲナス 黄花地丁絮ノ如シ 風ニ隨テ飛ブ(卷十九 穀部 蓬草子)⁽²⁾

「蓬」の和名が記され、具体的に植物の形状や性格が詳しく説明されている。この記述は朱熹が、『詩集傳』において、『詩経』衛風「伯兮」詩に注した記述を継承したものであることが指摘されている。⁽³⁾「伯兮」には、「自伯之東、首如飛蓬、豈無膏沐、誰適爲容」とあり、夫が戦争に行き自分の頭が「飛蓬」のようになったと詠んでいて、「飛蓬」は手入れのゆきとどかない、乱れてぼさぼさの髪に喩として用いられている。朱熹は、この記述について、「蓬、草名也。其華似柳絮、聚而飛、如亂髮也」と述べている。「蓬」を柳のわたに似た華が集まって飛ぶ性格をもつ草としている。『本草綱目啓蒙』は、この朱熹の説の流れを汲むとともに、やはり朱熹の説を継承していると思われる先行する本草書、貝原益軒『大和本草』(一七〇九年)にも学んでいるとみられる。『大和本草』には、次のようにある。

葉ハナデシコノ如ク 花ハ野菊ノ未開カ如シ 其實ハ後爲絮テ飛フ
 詩二首(如「飛蓬」)トイヘリ 河原ニ多シ(卷九 雜草類)

『本草綱目啓蒙』は、朱熹の説と『大和本草』にある具体的な説明を踏まえ、日本の草としては何にあてはまるか、名を異名とともに挙げ生態や形状をより詳細に記している。『本草綱目啓蒙』以前にも、和名は記されていないも

の、新井白石「東雅」(一七一七)や、『詩経』に関する書物、例えば江村如圭『詩経名物弁解』(一七三二)、岡元鳳『毛詩品物圖攷』(一七八五)などにおいて、朱熹の説、『大和本草』の説をあわせて継承する同様の指摘がみられる。葉の形状が瞿黍や野菊に、花が野菊や菊に似ているとか、後に絮が飛ぶなどと記述されている。江戸時代における、朱熹説に端を発した認識の定着がうかがわれる。

『詩経』の「飛蓬」についての朱熹の説に学び、江戸時代に生まれたキク科ムカシヨモギ属説は、現在でも尊重されている。「飛蓬」については他の説をとりながらも、「蓬」の第一の意味として挙げる辞書なども少なくない。⁽⁴⁾現在の中国においても「飛蓬」「長莖飛蓬」などは学名 *Erigeron acer* L.、*Erigeron elongatus* Ledeb. とあり、ムカシヨモギ属と考えられているようである。⁽⁵⁾朱熹に根ざす説が、今でも日中双方において根強く支持され尊重されていると言える。

以上、「飛蓬」ひいては「蓬」をムカシヨモギ属とする説について、そうした考えに至った経緯とともにみてきたが、一方でこれを批判する説がある。管見によれば牧野富太郎氏の指摘などが比較的早いものではないかと思われる。牧野氏は『日本植物図鑑』の、やなぎよもぎ(一名むかしよもぎ)の項目の中で、「漢名 蓬・飛蓬(共ニ誤用)、蓬ヲ昔ヨリよもぎニ充ツルハ極メテ非ニシテ、此レハあかざ科ノ草本ニテ我邦ニ産セズ」と記している。⁽⁶⁾さらに、後に「アカザ科のハハキギ(ホウキギ)すなわち地膚のような植物」とし、砂漠に繁茂して風に吹かれて根が抜け、繁多な枝が撓み円くなり、転々として転がり飛ぶ性格をもつものとも述べている。⁽⁸⁾牧野氏のこうした指摘は、『本草綱目』の「其飛蓬、乃藜蒿之類、末大本小、風易拔之、故號飛蓬」(卷二十二 穀之二)の記述を踏まえたものである。『日本植物図鑑』では触れていないが、後の文章の中ではこの記述が引かれている。「藜」とは、ヒユ科(旧アカザ科)の草のことであり、また、「末大本小」とある形状は特徴的なホウキギ属ホウキギのそれに当てはまる。

こうした牧野氏の説を、中国古典の用例を挙げながら、裏付けたとも言える一面をもつ論が植木久行氏の論である。植木氏は、『晏子春秋』「内篇 雜上」にみる「秋蓬」のありようについての記述「孤其根而美枝葉、秋風一至、

根且拔矣」を初めとして魏晉南北朝頃までの用例をいくつか挙げ、柳絮に似た花が飛ぶとした朱熹の説は不適切で飛ぶのは枝葉であることを明らかにした。『淮南子』『説山訓』の「見飛蓬轉而知爲車」(飛蓬の転がるのを見て車輪を發明した)は、とりわけ朱熹の説とは、かけ離れた例である。詳細については植木氏の論を参照されたいが、示された用例の他にも、根から離れ風に転がる「蓬」のありようがうかがわれる例は少なからずみられ、朱熹の説は指摘されるように妥当ではないと言えよう。とするならば、朱熹の説に端を発しているとおぼしい、「飛蓬」ひいては「蓬」をムカシヨモギ属の草とする説についても見直されるべきではないかと考える。その後、寺井泰明氏も同様に中国古典の用例に照らして、ムカシヨモギ属説や、一般に「よもぎ」と呼ばれる草はあてはまらないとされ、アカザ科のタンブルウイード数種としている。^⑭タンブルウイードとは、風に吹かれて根元から折れ球状になり野原を転がってゆく、ヒユ科(旧アカザ科)に多くみられる植物の総称であり、近年でもそのありさまが報告されている。^⑮タンブルウイードとして知られる学名 *Salsola tragus*、漢名、「刺沙蓬」は、南部を除く中国の広い領域での生息が確認されており、可能性のあるいくつかの草の一つではないかと思われる。^⑯

以上「飛蓬」についての説について、そのおおよそを述べてきた。従来からのムカシヨモギ属説は適当ではなく、中国古典の「飛蓬」「轉蓬」は、例えば「刺沙蓬」のように秋に根から抜け風に吹かれて転がり飛ぶ性格をもつヒユ科(旧アカザ科)の草、タンブルウイード数種と考えるのが現在のところ妥当ではないかと思う。とするならば、「蓬」はすべて、同様と考えてよいのかという問題が残る。

寺井泰明氏は、『礼記』の「蓬矢」や『西京雜記』の「蓬餌」の例を挙げ、それらは、魔よけの働きがあることから「艾」に似ているとされる。^⑰「艾」は『荆楚歲時記』に記された五月五日の艾人の風習などにみられるように辟邪の草として知られている。一方『説文解字』には、「蓬、蒿也」と記されている。「蒿」は主にキク科ヨモギ属の総称と考えられ、『説文解字』では、「蒿、鼓也」とある他、さまざま草が「蒿」もしくは「蒿」属とされている。中国現存最古の字書『爾雅』「釋草」にも「繁、皤蒿。蒿、鼓。蔚、牡鼓」とあり、『疏』で

はこれらは、「蒿」を色や実の有無によって区別した異名であるとしている。「艾」は、辟邪の草として知られ、また灸に用いられていたことから、他の草とは区別されていたのではないかとも思われるが、キク科ヨモギ属に属する草であるので、「蒿」と呼ばれる草の中には「艾」に近い草もあったと考えられる。「蓬矢」「蓬餌」の例と『説文解字』の記述を勘案すると、「蒿」と呼ばれたキク科ヨモギ属に含まれる草も「蓬」であった可能性は充分考えられるのではないか。^⑱「蓬」にいくつかの種類があることは、『爾雅』に「鬻、彫蓬。薦、黍蓬」とみえ、『疏』にも「草之不理者也、種類非一」とあって、古くから種別の認識があったことが窺われる。

なお、寺井氏は、ヨモギ属の草も「蓬」であったことを指摘しながら、あくまでもアカザ科のタンブルウイードの用例が圧倒的に多くヨモギ属の草は例外的とされる。この点については、どのような調査に基づくものか示されておらず検討の必要があると思われる。中国古典の「蓬」の用例の中で、「飛蓬」「轉蓬」の他にも「秋蓬」「孤蓬」など、風に転がる、あるいは飛ぶ草であることがおおむね明らかと言ってよい例は、比喩的な表現も含めて少なからず認められるが、一方必ずしも明らかではない用例が多数みられる。試みに『文選』の用例を調べてみると、全四十一例中、九例は「蓬菜」「蓬壺」、二例は現実の地名、一例は人名であり、それらを除く二十九例のうち、風に転がる、あるいは飛ぶ草であることが明らか、もしくは可能性が考えられる例は、比喩的表現が多いのだが、十例ほどであった。残りについては草のありようを見極めることは難しくタンブルウイードであるか否かも不明である。より古い文献の用例については、十三経をはじめ漢代以前の主な文献を丹念に調査した中渡瀬将之氏の論がある。^⑲中渡瀬氏が調査し示された用例をみると、風に飛ぶ草であることが明らかでない例がいくつか認められるものの、多くの用例は草のありようを見極めることが難しいものであった。

以上、「蓬」について、従来の諸説を検討し考察してきた。数種の草の呼び名であったらしく、今のところ、「刺沙蓬」などのように秋に根から抜け風に吹かれて転がり飛ぶ性格をもつヒユ科(旧アカザ科)の草、タンブルウイード、及び、「蒿」と呼ばれたキク科ヨモギ属に含まれる草の一部などを指していたものと考えられるが、それ以上のことは不明である。タンブル

ウイードが主であったかについても判断を留保すべきと考える。個々の用例は、実態として何を指すかを断定することが難しいものも多く、本稿では、不明な点は不明なままに論を進めることとした。

三

「蓬」とは、何かをめぐって縷々述べきたが、以下、平安初期までの漢詩文において「蓬」がどのように表現されているかについて検討してゆく^⑯。まず、はじめに、前節で問題にした「飛蓬」「轉蓬」などの用例がいくつか認められるので、それらからみてゆくことにしたい。

- ① 蓬客等更贈歌（『万葉集』巻五 八五六題詞）
- ② 不拘父兄、不近親戚。萍遊諸州、蓬轉異境。（『三教指帰』巻下）
- ③ 傾斯浮菊酒、願慰轉蓬憂。（安倍廣庭「秋日於長王宅宴新羅客」『懐風藻』）
- ④ 水咽人腸絶、蓬飛砂寒寒。（嵯峨天皇「賦得隴頭秋月明」『文華秀麗集』）
- ⑤ 涙如玉箸、流無斷、髮似飛蓬亂復低。（朝野鹿取「奉和春閨怨」『文華秀麗集』）
- ⑥ 暹暹不息又棲棲。風轉飛蓬客意迷。（「九月晦日各分一字 得迷」『田氏家集』巻下）
- ⑦ 木落歸根衆反潤。那教身得似秋蓬。（「無題」『田氏家集』巻下）
- ⑧ 单居抱影何所在、滿鬢飛蓬滿面塵。（紀長谷雄「貧女吟」『本文粹』巻一）
- ⑨ 經霜荒徑飛蓬轉。欲暮悲風落葉翻。（三善清行「晚」

□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

 『扶桑集』
卷七）
- ⑩ 令孤含「轉蓬之悲」者、皆是卿之不忠也。（三善清行「詰」眼文『本文粹』巻十一）

中国古典における「飛蓬」「轉蓬」は、先に述べたように、秋に根から抜け風に吹かれて転がり飛ぶタンブルウイードについての表現であり、「秋蓬」

「孤蓬」なども同様である。『文選』にみえる、曹植「雜詩 其二」の「轉蓬離本根、飄飄隨長風」（『文選』卷二十九）などは、よく知られた例で、③⑩に先行する例としても引かれている^⑰。曹植は、他にも「朔風詩」に「風飄蓬飛、載離寒暑」（『文選』卷二十九）、また「吁嗟篇」に「吁嗟此轉蓬、居世何獨然、長去本根逝、夙夜無休閒」（『曹子建集』）などがみえ、「飛蓬」「轉蓬」が曹植によって詩語として確立されたと言われる^⑱。以後、曹植に依拠したかと思われる例が、少なからず認められ、「飛蓬」「轉蓬」をどのような発想で、あるいは、どのような情感とともに用いるかを方向づけたと言ってもよい。「飛蓬」「轉蓬」「秋蓬」「孤蓬」は、「蓬」が根から抜け、風によって遠く飛ばされてゆくことから、本来あるべきところを離れ、さすらう人の比喩として多く用いられる。旅人、戦争に行く人、官吏として地方に赴く人などのありようを表現し、悲しみ、嘆き、あてどなさなどの情感をともなう用いられる。根から離れて飛ばされることから、家族や友人との別れにも重ねられ、孤独立な、よるべない境遇をも含意する^⑲。

②③⑥は、旅人のありようの比喩、もしくは、旅人とかかわらせたものである。②は、既に指摘があるように、潘岳「西征賦」の「陋吾人之拘攣、飄萍浮而蓬轉」（『文選』卷十）が踏まえられており、⑥は、魏の明帝「燕歌行」の「翩翩飛蓬常獨征、有似遊子不安寧」（『芸文類聚』卷四十二）などにも学んだものかと思われる。⑦⑩は、②③⑥のような空間的な旅ではなく、より内面的なあてどなさ、彷徨である点に違いがみられる。「秋蓬」を用いた早い例としては、『晏子春秋』「内篇 雜上」の「輔拂無一人、諂諛我者甚衆、譬之猶秋蓬也、孤其根而美枝葉、秋風一至、根且拔矣」があるが、「秋蓬」の飛ぶ様を国家の衰退になぞらえたものであり、より⑦の用い方に近い例としては、司馬彪の詩にみえる「秋蓬獨何辜、飄飄隨風轉」（『芸文類聚』卷八十二）などが挙げられよう。あるいは、「秋蓬」の語は用いていないが、先にも挙げた潘岳の「西征賦」「陋吾人之拘攣、飄萍浮而蓬轉」なども参考にされているのではないか。「西征賦」では、武帝が亡くなり楊駿が誅せられ世の中がめまぐるしく変わる中、官吏として拘束され自分を変えて生きる我が身のありようを「蓬」が根を離れて風に翻るさまになぞらえて、否定的に表現したものである。⑦の「秋蓬」は、島田忠臣「無題」の最後の句にみえるが、

先立つ第二句には、「一日三廻省我躬」とあり、⑦が自らの身のありようの戒めとして述べたものと解せるならば、「西征賦」に学んだものと考えるところもできよう。

①は「蓬」の使用の早い例で、『万葉集』の題詞にみえるものである。肥前国松浦を訪れた旅人がそこで出会った美しい女性に歌を贈ったということで、「蓬客」を旅人の意で用いている。この例も「飛蓬」「轉蓬」を前提としての表現と考えられる。但し、「蓬客」は、管見によれば①以前には例がみえない。孟郊「送諫議十六叔至孝義渡後奉寄」に「浪鳧驚亦雙、蓬客將誰僚」(『全唐詩』三七八卷)とあるが、指摘されるように孟郊の生没年からいっても、これに依拠したとは考えにくい。題詞の制作者が、より意味が伝わりやすいように工夫した表現なのではないかと思われる。「客」と結びつくことで、旅人という意味が明確になっている。

④⑨は、索漠とした景を構成する景物として対象化されている。④は、そうした点とともに、砂、寒さなどの類似から、鮑昭「蕪城賦」の「稜稜霜氣、歎歎風威。孤蓬自振、驚砂坐飛」(『文選』卷十一)などからも発想を得たものか。⑨は、④と共通しつつ、霜との関わりから王僧達「和琅邪王依古」の「仲秋邊風起、孤蓬卷霜根」(『文選』卷三十一)、また、路次目にした墓と「飛蓬」の取り合わせの点から、白居易「青塚」の「上有飢鷹號、下有枯蓬走。茫茫邊雪裏、一掬沙培塿」(0122)などにも学んだものかと思われる。日本では、「飛蓬」「轉蓬」の現象はみられないので、おそらく⑨は、「飛蓬」がどのようなものか充分にはわからないまま、文学から学んだ理解のみで、路次目にした冷ややかで索漠としたありさまを、あえて「飛蓬」の語を取り入れて表現したものと言えよう。

⑤⑧は、夫が出征し、あるいは、夫に去られて悲しみに沈む女性の乱れた髪^⑤の比喩として用いたもので、前節で触れるところのあった『詩経』衛風「伯兮」の「自伯之東、首如飛蓬」に依るものである。類似した例は、『玉台新詠』にもいくつみられる。

なお、「飛蓬」「轉蓬」を前提とした表現であるか定かではないので挙げなかったが、髪^⑤の比喩として用いた次のような例もある。⑤⑧に通う表現でもあるので、ここで触れておきたい。

⑪ 恆見蓬頭婢妾。已過登徒子之好色。(『三教指帰』卷上)

⑫ 蓬亂之髮。踰登徒妻。(『三教指帰』卷中)

いずれも宋玉「登徒子好色賦」の「其妻蓬頭鬢耳、齟齬歷齒」(『文選』卷十九)を踏まえた表現である。「蓬頭」は、登徒子の妻の醜貌の一つの要素として挙げられていて、乱れた髪^⑫の意である。『詩経』の「飛蓬」に拠るものとみることもできようが、「蓬」には、物の盛んな様の意で用いられる例もあることを勘案すると、「蓬」が草として繁茂するありようからの表現とも考えられる。『山海經』「西山經」に、西王母の風貌として「豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝」がみえるが、同じ『山海經』「海内經」には「玄狐蓬尾」の例もみられ、西王母の「蓬髮」は、もじやもじやとして乱れた髪^⑫のさまを、繁茂する「蓬」になぞらえて表現したものではないかと思われる。登徒子の妻の「蓬頭」も、西王母の「蓬髮」と同じような発想によるものと考えられることもできるのではないか。⑫は男性の髪^⑫の比喩であることが留意されるが、男性に用いた例としては、楊子雲「長楊賦」の「頭蓬不暇梳」(『文選』卷九)がある。漢の高祖の、戦争にあけくれ乱れた髪^⑫のありようを「蓬」になぞらえた例である。

以上「飛蓬」「轉蓬」にかかわる例について検討してきた。「飛蓬」の現象は日本ではみられないが、そうであるにもかかわらず関心を向け、どのような発想で、どのような情感とともに用いるか、中国文学における例によく学んで自らの表現にとり入れていることがわかる。⑨のように、実態がわからないまま、情感、含意の理解のみで用いたと思われる例もみられた。

四

前節では、「飛蓬」「轉蓬」と、それに関わる例について検討したが、次に、同様にいくつかのまとまった例が認められる住まいに関わって用いられたものについてみてゆきたい。

- ① 蓬華沈淪、但恥「負擔之賤」。(主金蘭「対策」 『経国集』卷二十)
- ② 魏侯之輅、軾於蓬門。何更扣角。(『三教指帰』卷上)
- ③ 生蓬茨衡、長繩樞戸。(『三教指帰』卷下)

④客斷柳門群雀噪、書品蓬室晚螢輝。(桑原宮作「伏枕吟」 『凌雲集』)
 ⑤山鳥愁_レ傷_レ構_レ巢樹、野人畏_レ着_レ編_レ宇蓬。(巨識人「和滋内史奉使遠
 行觀野燒之作」 『文華秀麗集』)

⑥所以臣欲_下稅_上駕於蓬華之門、赴_中遊於薛蘿之徑_上者。(「爲_二主殿頭當
 麻大夫_一請_二致仕_一表」 『都氏文集』卷三)

⑦慣得犬無吠客聲、不知車馬訪蓬衡。(「菅給事過訪兼示宮櫻詩草因以
 長句奉謝」 『田氏家集』卷中)

⑧蓬華門庭華艷非。蒙君潤色作芳菲。(「暮春花下奉謝諸客勸酒見賀竹
 平及第」 『田氏家集』卷下)

⑨風吹藥種家三世、露落蓬門路九泉。(「雲州茂司馬、視_二詩草數首_一。
 吟詠之次、適見_下哭_上菅侍暨_レ之長句。不_レ勝_二復悼_一、聊敘_二一篇_一」 『菅
 家文章』)

⑩暁出蓬門去、昏尋澗水還。(「晚秋二十詠 樵夫」 『菅家文章』)

⑪如今愚僧生蓬艾門。(『新撰字鏡』序)

ほとんどの用例が、貧しく粗末な住まい、あるいは門を意味する比喩的表
 現である。⑤のみ比喩ではなく屋根の材料としての「蓬」が対象化されている。
 初唐までの中国における「蓬」の用例は、「飛蓬」「轉蓬」に関わるものと住
 まいに関わるものが多く認められるのであるが、平安初期までの日本の漢詩
 文においても同様であると言える。

住まいに関わる「蓬」の早い例は、『莊子』「讓王篇」の原憲の故事にみら
 れる。

原憲居魯。環堵之室、茨以生草、蓬戸不完、桑以爲樞、而甕牖二室、褐
 以爲塞。(『莊子』「讓王篇」)

原憲の故事は、広く知られたもので、『淮南子』「原道訓」、『史記』「遊俠
 伝」や、『韓詩外伝』などにも引かれ、いづれにも「蓬戸」の用例が認められる。
 その他、『礼記』「儒行」には、「儒有一畝宮、環堵之室、簞門圭窻、蓬戸甕牖」
 とあり、『韓詩外伝』には、原憲の故事の他にも、子夏の言葉として、「雖居
 蓬戸之中、弹琴以詠先王之風」(卷二)の例がみられる。これら「蓬」の用例
 は、高潔、高德の士の貧しく粗末な家、特に戸の材料としての例である。同
 様の用いられ方は、その後も、東方朔「非有先生論」の「積土爲室、編蓬爲戸」

(『文選』卷五十一)や、劉孝標「辨命論」の「土室編蓬、未足憂其慮」(『文選』
 卷五十四)などにもみえ、さらに、家の材料でも屋根の材料とする例もみら
 れるようになる。平安初期までの日本の例の中では、⑤がそうした例である。

やがて、戸や屋根といった家の具体的な箇所を離れ、また、具体的な草とし
 ての意味も薄れて、粗末な家の意味を持つ比喩的な慣用表現として、室、居、
 廬などと結びついて「蓬室」「蓬居」「蓬廬」などの熟語を作って汎用された。
 先に挙げた日本の例では④に「蓬室」の例がみえる。住まいに関わる「蓬」は、
 家が粗末であること、貧しさを表すが、『莊子』を始めとして『礼記』その他
 の例にみられるように、高潔、高德、清貧、悠々自適といったプラスの価値
 を帯びて用いられる。日本の例では、②がそうした例である。段干木の故事
 に基づくもので、高德で清貧に生きる隠者の門を「蓬門」と表現している。
 ⑨「露落蓬門」の例も単に貧しい住まいというだけではなく、亡き友である
 菅侍暨が清貧に生きた人であった意をこめた表現と解せよう。②も⑨も、第
 三者の立場から、他者の住まいのありようについて用いたものである。

寺井泰明氏は、中国古典においては、「隠士の矜持のようなもの最後ま
 で「蓬居」「蓬戸」などの語から離れなかった」のに対し、日本の用例にはそ
 うした矜持はみられず、むしろ嘆く例もあるとして、日本と中国の違いを述
 べておられる。しかし、既に見たように、②は肯定的に用いた例であり、⑨
 にもそうした要素が認められる。あるいはまた、⑥も、むしろ望ましい住ま
 いとして用いた例である。⑥では、官を辞す願いを述べる中で、落ち着くべ
 き自らの家を「蓬華之門」としており、謙遜、卑下でありつつ肯定的に用い
 ている。帰隱に価値を認め願う、張平子「歸田賦」の「將迴駕乎蓬廬」(『文選』
 卷十五)に依拠したものかと思われる。

中国古典における住まいに関わる「蓬」においても、プラスの価値を帯び
 て用いられるだけでなく、日本と同様に自己卑下や、謙遜の言葉として用い
 られたり、不遇感、嘆き、自嘲、第三者からの同情や、惜しむ気持ちなどがこめ
 られる場合も多い。『文選』にみえる例をいくつか挙げると、まず、自らの
 出自の卑しさを謙遜卑下して述べる中で用いた例として王子淵「聖主得賢臣
 頌」の「生於窮巷之中、長於蓬茨之下」(卷四十七)、江淹「詣建平王上書」の
 「下官本蓬戸桑樞之人」(卷三十九)がある。③「生蓬茨衡」や、⑩「生蓬艾門」

は、こうした表現に学んだものと思われる。同様の例は白居易「答故人」の「我本蓬華人、鄙賤劇泥沙」(281)にもみられる。曹植「贈徐幹」の「顧念蓬室士、貧賤誠足憐」(卷二十四)は、親しい友人を「蓬室士」と比喩的に表現し、清貧や高潔の意をこめながらも不遇、貧しさを惜しみ、同情する思いをもつて詠んでいる。④「蓬室」は、こうした例に学んだかと思われる。⁽²⁸⁾謝靈運「擬魏太子鄴中集詩 徐幹」の「華屋非蓬居 時髦豈余匹」(卷三十)は、時めく才子たちと肩を並ぶべくもない自らのありようを、住まいの比喩を用いて表わしたものである。⑧「蓬華門庭華艷非」は、こうした例も参考にしたのではないか。共に謙遜卑下の表現である。傅長虞「贈何劭王濟」の「歸身蓬華廬」と表現している。続けて「樂道以忘飢」とあるが、指摘があるように帰隱に価値を認めているのではなく、皮肉と自虐がこめられていると解することができる。⁽²⁹⁾

以上、中国における住まいに関わる「蓬」について、日本の例との関係にも触れながらあらあら述べてきた。平安初期までの日本の例は、いずれも中国古典に学んだものと言えるが、門と結びつけての表現が多いことに気づかされる。すべて、粗末な門、あるいは、粗末な家の意で用いている。②⑥⑦は前者、③⑧⑨⑩⑪は後者と考えられる。また、肯定的にあるいはそうした要素を含んで用いられたものは②⑥⑨であり、それ以外は第三者からの⑩を除き謙遜卑下の表現である。⑥⑧の「蓬華之門」「蓬華門」に先行する例は、管見によれば見あたらないが、先に引用した『礼記』「簾門圭竈、蓬戸甕牖」などを参考に、「蓬」「簾」などを材料として作った門の意から、粗末な門、粗末な家を意味する語として用いたとも考えられるのではないか。「蓬華廬」が、先に挙げた傅長虞「贈何劭王濟」に、「蓬華人」が、白居易「答故人」(281)などにみえ、①⑧の先例として引かれてもいるが、これらの例も同じように考えてよいものと思われる。「蓬門」の早い例は、『風俗通義』に「原憲蓬門而株楹」(「十反」)がみられる。先に引用した原憲の故事を踏まえたもので、「蓬戸」が、「蓬門」に、また、桑を材料とした楹が、切り株を材料とした楹になっており、故事が伝えられる過程での変化が認められる。出入り口ということ、戸と門に互換性があることがうかがわれ興味深い。その後の

例は、『芸文類聚』に沈約「謝母封建昌國太夫人表」の「慶溢蓬門、榮流素族」(卷五十一)、沈炯「六府詩」の「水廣南山暗、杖策出蓬門」(卷五十六)、謝莊「懷園引」の「青苔蕪石路、宿草塵蓬門」(卷六十五)などがみられ、唐代になると杜甫「客至」の「花徑不曾緣客掃、蓬門今為君開」をはじめ多くの用例が認められる。日本の例のように謙遜卑下して用いた例も多い。白居易「小庭亦有月」にも、「長跪謝貴客、蓬門勞見過」(2960)の例をみる。

門に関わる例、「蓬門」「蓬華門」「蓬茨衡」「蓬衡」「蓬艾門」は、すべて比喩的表現であるが、それらを粗末な門、粗末な家の意で用いるにあたっては、もともとは、「蓬」を材料として作った門の意から派生した語であることを理解していたのではないかと思われる。よく知られた原憲の故事、『礼記』の記述、『文選』の「非有先生論」や「辨明論」、あるいは白居易「詠拙」の「葦茅爲我廬、編蓬爲我門」(2959)などから、そうした理解を得ていたのではないだろうか。その点はおくとしても、用例をみるかぎり、すべてが比喩表現であることから、この時期までは、「蓬」を門に生える草として対象化するといった発想はなかったものと考えられる。⑦について、『田氏家集注』では、「蓬衡」は、あたりに蓬の生えた粗末な門」としているが、⁽³¹⁾これまでの検討から、単に粗末な門の意とするべきではないだろうか。

住まいに関わる「蓬」としては、他に荒れた家に生える草としての例が『新撰万葉集』にみえる。

⑫ 戸牖荒涼蓬草亂。每秋鎮待雁書遲。⁽³²⁾ (『新撰万葉集』卷上 秋)

⑬ 蓬生荒屋前無友。郭公鳴化還古槽。(『新撰万葉集』卷下 夏)

先にみた①から⑪までの例では、⑤以外はすべて、いわば慣用的な比喩表現であったのに対し、⑫⑬はともに景物としての「蓬」を対象化している点が注目される。『新撰万葉集注釈』では、⑫について、丘巨源「聽隣妓」の「蓬門長自寂、虛席視生埃」(『玉台新詠』卷四)を例として引いているが、この例の「蓬門」も述べてきたように「蓬」の生える門の意ではなく、貧しく粗末な門の意であると考えられる。⑫⑬にみられるような荒れた家の庭に生える「蓬」の例としては、江淹「雜體詩 左記室 詠史」の「顧念張仲蔚、蓬蒿滿中園」(『文選』卷三十一)などがある。張仲蔚の庭に茂る「蓬蒿」を詠んだものである。李善注の引く『三輔決録』にも仲蔚について「所處蓬蒿没人」とあり、『芸

文類聚』「蓬」(巻八十二)にも引かれている。清貧に生きた隠者仲蔚の「蓬蒿」生い茂る庭は広く知られていたと言えよう。白居易「傲陶潛體詩 其二」にも「蓬蒿生庭院、泥塗失場圃」(0214)の例がみられる。なお、日本の漢詩文における庭に生える「蓬」の例は、平安初期まではこの⑫⑬のみであり、後のかな文における展開をみてゆく上で留意すべきと考えるので、別稿において改めて取り上げ検討することとしたい。

五

「飛蓬」「轉蓬」に関わる例、住まいに関わって用いられる例について検討してきた。以下では、その他の例についてゆく。まず、これまで挙げた例以外で、人のありようの比喩として用いられたものがいくつか認められるので、それらから検討する。

- ① 珍映辨矣、蓬性不可量矣。鳳鷄別也、草情豈堪識也。(百濟倭麻呂「對策」 『経国集』巻二十)
- ② 乃知^三竜門之恩、復厚^二蓬身之上。恋望殊念、常心百倍。(藤原房前『万葉集』巻五 八一二)
- ③ 含弘之徳、垂^二恩蓬体。不貲之思、報^二慰陋心。(大伴家持『万葉集』巻十七 三九六九)
- ④ 曲蓬糝麻、不扶自直。(『三教指帰』巻上)
- ⑤ 高蓬聚墟壠、蘭蕙鬱山陽。(「遊山慕仙詩」 『性靈集』巻一)
- ⑥ 蓬蒿獻草任垂白、菅蒯開花欲奪紅。(「元慶五年冬大相國以拙詩草五百餘篇始屏風十帖仍題長句謹以謝上」 『田氏家集』巻中)

①②③にみる「蓬性」「蓬身」「蓬体」は、凡庸でいたらない私、我が身の意で、自分自身について謙遜卑下した例と考えられる。先にみた、住まいに関わる「蓬」でも謙遜卑下した比喩が多くみられたが、それらが、貧しさや出自の賤しさを表していたのに対し、やや異なつて、むしろ、人としての凡庸さ、いたらなさ、りっぱな人間ではないことを含意しているものと思われる。②は、藤原房前が大伴旅人への手紙において自らに用いた語、③は、大伴家持が大伴池主への手紙において自らに用いた語であり、ともに、相手と

の関係性を考えると、自らを謙遜して述べたものであつても、貧しさや賤しさの意をこめたとは考えにくい。①については、『芸文類聚』(巻三十八)の徐悱妻劉氏「祭夫文」の「幸移蓬性、頗習蘭蕙」が例として引かれている。この例も「蘭蕙」と対比されていることから、人としての凡庸さ、いたらなさを含意していると解せよう。①②③の例は、ともに『莊子』「逍遙遊篇」の「夫子猶有蓬之心也夫」の「蓬」の用い方に近い。『莊子』の例は、大きな物の使い方がわからない恵子に対する莊子の言葉であり、解釈に諸説あるが、「蓬之心」は、人としての小ささ、考えの狭小さを意味しているものと思われる。『莊子』に依拠したと考えられる「蓬心」の用例は、『文選』や白居易にもみられる。中でも謝玄暉「拜中軍記室辭隋王牋」の「效蓬心於秋實」(『文選』巻四十)は、隋王への手紙の中で自らを卑下した表現である。⑥「蓬蒿」も、人のありようについての比喩であり、『田氏家集注』では、白居易「初到江州、寄翰林張李杜三学士」の「蓬蒿隨分有榮枯」(0910)の例を挙げて、「身分卑しいものの喩え」としている^⑤。そう解釈することもできようが、①②③同様、人としての凡庸さ、いたらなさ、小ささなどを含意すると考えることも可能であろう。白居易「寄獻北都留守裴令公」には、「鸞鳳上寥廓、燕雀住蓬蒿」(3333)の例もみえる。

④は、『荀子』「勸学」、『史記』「三王世家」その他に散見される表現を踏まえたもので、曲がった蓬が麻の中にまじると自然に真っ直ぐになるの意である。「曲蓬」は、人となり、素行が僻曲なる者の喩えとして用いている。潘岳「河陽縣作 其二」の「曲蓬何以直、託身依叢麻」(『文選』巻二十六)をも参考にしたものと思われる。

⑤の「高蓬」は、「蘭蕙」と対比されており、立派ですぐれた人の比喩である。「蘭蕙」に対し、凡庸で、とるにたりない者の喩えである。「高蓬」の例としては、沈約「脩竹彈甘蔗文」の「頗異高蓬、陽景所臨、由來無隔」(『芸文類聚』巻八十七)がある。草を擬人化しており、「澤蘭」や「萱草」が、自分たちは「高蓬」とは異なり、陽の当たる所にいると述べている。⑤でも、「高蓬」は「蘭蕙」が日当たりのよい場所で栄えることと対比されており、その点も類似する。立派な人ととるにたりない者をそれぞれ草に喩え、芳草とそうでない草との対比で表現する発想は、早くは『楚辭』の「離騷」にみられる。

あるいはまた、「蓬」を凡庸な者の喩えとして用いるのは、先に述べた「蓬之心」「蓬心」にも通じる。一方「蒿」は、「蒿里」の語からの連想で墓と関わらせて用いられることも多いので、「墟壠」との取り合わせもふさわしい。⑤は、中国文学の「蓬」や「蒿」の用いられ方、コノテーションを充分に理解した上で、自らの表現に取り入れられている例と考えられる。立派な人とそうでない者の比喩として対比的に用いながら、『楚辞』『離騷』のように、人の世のありようを単に否定的に捉えているのではなく、世のすべての人やものの無常を説くための具体的な例の一つとして用いている点も留意される。

その他、次のような例もみられる。

⑦蓬矢葦戟、神符呪禁之族、以防外難。(『三教指帰』巻中)

⑧桑弧戸上加蓬矢。(『夢』阿滿) 『菅家文章』)

⑨子談高捷蓬、詞宏踏壁。(三善清行「立」神祠) 『本朝文粹』卷三)

⑧「蓬矢」は、先に触れたように辟邪の具である。中国における男子誕生の折の慣習が、平安初期の貴族社会でも行われていたことがわかる。⑦は、老荘の教えを説く中で用いられた例で、⑧に類する。⑨は、既に指摘があるように『莊子』「至楽篇」などにみえる列子の故事にもとづくもので、「蓬」は道ばたの草である。

六

以上、平安初期までの漢詩文において「蓬」がどのように用いられているか、具体的な用例を挙げつつ検討してきた。どのような発想で、どのような情感とともに、また、どのような意をこめて用いるか、おおよそ中国文学の表現によく学び、自らの表現としている。「飛蓬」「轉蓬」に関わる用例と住まいに関わる用例が多く認められた。「飛蓬」「轉蓬」に関わる表現については、風に吹かれて転がり飛ぶタンブルウィードの現象は、日本では、目にする機会がなかったであろうと思われるが、語の帯びる悲しみや寂しさの情感や、孤独、さすらいなどの含意に心ひかれ、関心を寄せて用いたものと思われる。中国古典においては、引用した『晏子春秋』の例のように政治に関す

る比喩として用いられることもあるのだが、平安初期までの日本においてはそうした例はみられなかった。住まいに関わる「蓬」については、門とむすびつけての表現が多くみられた。それらすべてが、比喩表現であり、粗末な門、粗末な家の意で用いられ、用例をみるかぎり、「蓬」を門に生える草として対象化するといつた発想はなかったものと思われる。庭に生える「蓬」の用例は九世紀末になって初めてみえる。庭に生える草としての「蓬」を、取り上げるべき景物として対象化するという発想も、中国に学んだものであり、以後の和歌や物語における「よもぎ」の表現を生み出していったものと考えられる。また、その他として取り上げた例も含めて、人のありようの比喩として、さまざまな意をこめて用いる例が多く認められた。旅人、さすらい人、悲しみに沈む、あるいは醜い女性。貧しさ、賤しさ、そこに清貧、高潔などの肯定的な意もこめたもの。謙遜、卑下の意をこめたもの。凡庸、とるにたらない小人、あるいは素行、人となりの悪しき者など。いずれも中国文学にみる「蓬」の豊かで多様な表現から学んだものである。空海『性霊集』にみえる例のように、主張をもった自らの文章の中にたくみに取り入れた例もみられた。

平安初期までの漢詩文にみられる「蓬」についての今回の検討を踏まえ、別稿(二)では、平安時代のかな文における「よもぎ」について考察することとした。

注

- (1) 寺井泰明「「蓬」「蒿」「艾」と「よもぎ」」(『和漢比較文学』4号、一九八八・一一)、「転がる「蓬」」(『花と木の漢字学』大修館書店、二〇〇〇)。また、寺山宏『和漢古典植物考』(八坂書店、二〇〇三)、木下武司『和漢古典植物名精解』(和泉書院、二〇一七)などでも言及されている。
- (2) 杉本つとむ編著『本草綱目啓蒙 本文・研究・索引』(早稲田大学出版会、一九七四)。
- (3) 植木久行『曹植呼嗟篇考―轉蓬・飛蓬の詩的心象をめぐって―』(『中国古典研究』二〇号、一九七五・一)。
- (4) 貝原篤信編録『大和本草』(永田調兵衛、一七〇九―一七一五)。
- (5) 例えば『広漢和辞典』『新漢字源』『新漢語林』など。加納喜光『詩経・I 恋愛詩と動植物のシンボリズム』(汲古書院、一九九八)においても、『詩経』召南『騶虞』にみえる「蓬」をヤナギヨモギとしている。『大漢和辞典』は、「飛蓬」も含めてこの説をとる。
- (6) 中国科学院植物研究所『中国高等植物図鑑』(科学出版社、一九七二)。潘富俊『唐詩植

- 物圖鑑』(城邦文化、二〇〇二)では、唐詩にみられる「蓬」をすべて「今・飛蓬」、学名 *Eriogon acer*』としてゐる。
- (7) 牧野富太郎『日本植物図鑑』(北隆館、一九四〇)。
 (8) 牧野富太郎『植物一日一題』(博品社、一九九八)。
 (9) 植木久行、注(3)論文。
 (10) 寺井泰明、注(1)論文、「転がる「蓬」」。
 (11) 「転がる雑草」(『ナショナルジオグラフィック』19巻12号、二〇一三・一一)。
 (12) 増淵法之『日本中国植物名比較対照辞典』(東方書店、一九八八)。
 (13) なお、寺井泰明氏は、注(1)論文、「転がる「蓬」」で、現地での採集に基づき、「沙蓬」、学名 *Astrophyllum arenarium* Bieb. がその一つではないかと指摘している。
 (14) 寺井泰明、注(1)論文。
 (15) 寺井泰明、注(1)論文、「転がる「蓬」」。中渡瀬将之氏も「中国詩文における蓬と転蓬」(『横浜国大言語研究』二九巻、二〇一・三)において同様の指摘をしている。
 (16) 斯波六郎主編『文選索引』(中文出版社、一九七二)によって調査した。
 (17) 中渡瀬将之、注(15)論文。
 (18) 以下に挙げる本文の引用は、『懐風藻』『文華秀麗集』『三教指帰』『性霊集』『菅家文草』は日本古典文学大系(岩波書店)、『凌雲集』は小島憲之『国風暗黒時代の文学 中(中)』、『経国集』は小島憲之『国風暗黒時代の文学 中(下)』、『経国集』巻二十は津田博幸『経国集対策註釈』、『都氏文集』は中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釋』、『田氏文集』は内田順子『田氏家集索引』、『扶桑集』は田坂順子『扶桑集 校本と索引』、『万葉集』『本朝文粹』は、新日本古典文学大系(岩波書店)、『新撰万葉集』は、浅見徹・木下正俊『新撰万葉集 校本篇』に、それぞれ依った。なお、一部表記などを改めた箇所がある。また、本稿では、早くから中国でも多くの用例がみえる、「蓬菜」及び、関連する「蓬壺」「蓬宮」「蓬山」「蓬瀛」などについては、例を挙げることはせず検討の対象とはしなかった。
- (19) 日本古典文学大系『懐風藻』(岩波書店、一九六四)、柿村重松『本朝文粹註釋』(富山房、一九六八)。
 (20) 植木久行『唐詩歳時記』(明治書院、一九八〇)。
 (21) 植木久行氏は、曹植の「飛蓬」「轉蓬」の詩的イメージを要約して、次の三点を指摘しておられる。①旅人の彷徨(流浪)・兵士の転戦・役人の貶謫(左遷)などを連想する用法。②非循環性・一回性の属性が、彷徨・転戦・貶謫の永続性を言外に示唆することになり、より深く悲哀感を高める。③肉親との別れ、家族との別れ、兄弟や親友との別れを連想させることができる。植木久行、注(20)。
- (22) 日本古典文学大系『三教指帰 性霊集』(岩波書店、一九六五)。
 (23) 植木久行、注(3)論文。
 (24) 土屋文明『萬葉集私注』(筑摩書房、一九四九〜一九五六)。
 (25) 作品番号は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四)の番号を付した。ほぼ同様の記述は、『文選』李善注に引く『尚書大傳』や、『芸文類聚』にもみえる。
 (26) 寺井泰明、注(1)論文。
 (27) 小島憲之『国風暗黒時代の文学 中(中)』(塙書房、一九七九)。
 (28) 岩波文庫『文選 詩篇 三三』解説(岩波書店、二〇一八)。
 (29) 小島憲之『田氏家集注 卷之上中下』(和泉書院、一九九一〜一九九四)、津田博幸『経

- 国集対策註釈』(塙書房、二〇一九)。
 (31) 小島憲之、注(30)。
 (32) 『新撰万葉集 校本篇』注(18)の底本、寛文七年版本には「盡」とあるが、他本に従った。
 (33) 新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈 卷上(二)』(和泉書院、二〇〇六)。
 (34) 津田博幸、注(30)。
 (35) 小島憲之、注(30)。
 (36) 柿村重松、注(19)。
 「付記」本稿をなすにあたって宮城教育大学名誉教授鳥森哲男先生より、さまざまなご教示を賜った。厚く御礼申し上げます。